



学位申請者 吉松久美子

論文名 フロンティアの終焉

—移動するカレン族の民族誌—

【審査の結果】

2012年11月13日、西井涼子（主査）、河合香吏、三尾裕子、内堀基光（放送大学）、速水洋子（京都大学）からなる審査委員会により、標記論文の審査ならびに最終試験を実施し、当該論文を合格と判断するとともに、最終試験を合格とした。

本博士論文は、北部タイ山地に居住するスゴーカーレン族の定住化がまさに急速に進行した時期における調査をもとに、移動という重要でありながらカレン研究においてはこれまであまり焦点化されてこなかった人間の社会を形成する営みに注目して記述した貴重な民族誌である。スゴーカーレン族は北部タイにおいて1960年代まで頻繁に村落を移動させて分散拡大していた。調査当時の1980年代から90年代は定住化が急速に進行した時期であったが、依然として調査地では移動の文化が保持されていた。彼らの生活のあらゆる部分、家や村のような社会の構成単位、生計をなす道具類、生業形態、年中行事、結婚式や葬式などのライフサイクルの節目における各種行事、親族婚姻関係、超自然的存在などすべてが移動を核として組み立てられていることを見だし、そのことを説得的に論じている。重厚で細部にわたる入念な調査、そうした調査を正確かつ説得的に示す記述力、またデータから問題の本質を的確につかみ出して提示し、理論化に結びつけた研究であると評価し、審査委員は全員一致で本論文が博士（学術）の学位を授与するに十分値するものであると判断した。

【論文の概要】

本論文は序章に続く第6章と終章から構成されている。

序論においては、先行研究における焼畑耕作民の移住を検討してカレン族の移動における理論的分析の可能性を考察している。そこでは、移動が、カレンという人間集団にとって生業形態によるものか、それとも世界観によるものか、あるいは別の理由によるのかを、民族誌記述のなかで明らかにする意図が表明されている。また、調査

地がカレン族の移動の東辺のフロンティアに位置しているゆえがゆえに移動の文化が保持されてきたことを指摘する。

第1章は民族名称である「カレン」の生成を扱っている。カレンという呼称はビルマ語に由来する他称であり、王国（あるいは国家）の統治政策、キリスト教の布教活動、および民族誌的な調査が互いに密に絡み合いながら生成が促された民族名称である。ゆえにその生成を追うことが民族誌的研究を論じることである。頻繁な移動が彼らの文化の特徴として言及されつつも、研究課題としては周辺に留めおかれた現状を述べる。民族としての「カレン」は四段階を経て生成されるが、本論の調査対象である「移動するカレン族」は第一段階の断片的な記録の時代にまでさかのぼることができる。第二段階では口承伝承にもとづく民族移動が分析され、第四段階ではもはや移動をしなくなった村落を拠点として移動する個人が研究対象となっている。本論はこれまで検討されてこなかった第三段階における小集団での移動を論じることが目的であるとする。

第2章で調査地の概要を紹介している。調査地として選択されたのはキリスト教や仏教の影響がまだそれほど顕著ではないアニミズムを信仰している村落であった。まず、山間部溪流沿いに形成された居住地域や、季節の変化に応じて営まれる狩猟採集と焼畑を生業とする村の一年間の暮らし、及びそこで生活する人間としての彼らの一生を概観した。さらに、移住から定住へと変わる調査地の歴史的背景をタイ国の近代化政策と関連づけながら紹介している。

カレン族の移動の単位はゴ（国）、ジ（村）、ドウ（家）であり、それぞれの単位における移動の諸相を第3章から第5章で論じた。

第3章はゴ（国）の移動を扱っている。ゴとは川の源流を仰ぎ見ることができる空間であり、標高600メートルから1000メートルの山間部の小盆地を流れる川を基準として形成される領域である。ゴとは境界をもつ一つの領域であり、本論は、そうしたゴからゴへの移動の延長上に死者のゴ（国）への帰還があると論じる。死者のゴは断絶した異次元に存在するのではなく、隣接する共時の空間である。彼らの日常は定住化によって変わりつつあったが、死者のゴはまだかつてのフロンティア色を濃厚に残していた。葬式を検証事例として、ゴが太陽の方向（東西）と川の流れ（川上川下）と上下を基本方位として形成される領域で、ゴにはゴを支配する領主がおり、領主の治めるジ（村）で、ジの住人たちはゴ内の恵みに拠って暮らしをたてるという彼らのゴ観を明らかにした。

第4章はジ（村）の移動を論じている。ジの世帯構成を分析して移動するジの特性を、ジにはジコ（村長）と呼ばれる長がおり、ジコは父から息子へと継承が期待されることを明らかにしている。移動するジはキョウダイ間のドウ（家）の紐帯によって維

持され、適正戸数は10軒前後となる。また、1960年代まで繰り返されていたジ（村）の移動を再構築した。ジは一支流一村を基準として形成され、ジコはゴに進出した「最初の移住者」であり、ジ内においては系譜上の「最年長者」でなければならなかったが、一つの川に二村以上が建てられるようになると、ジコの条件である「最年長者」と「息子の継承」が矛盾するようになったとする。ジコの役割は居住許可を得たゴの神を祀る村祭を催すこと、ジの構成単位となる夫婦（家）をジに統合すること、焼畑における豊作を祈念することである。ジコはジの「最年長者」でなければならず、「最初の移住者」「最年長者」「息子の継承」というジコの条件は異なる背景に依拠しているがゆえに、ジコの死亡時にジが分裂移動せざるを得ない状況へと至る経緯を記述した。

第5章ではドウ（家）の移動を論じている。ドウは分裂増殖していくジの分芽に相当する。ジの移動は調査時には終わっていたが、家は依然として4～5年ごとには建て替えられ、分家し、ときにジからジへと移っていた。頻繁な建て替えにもかかわらず継続していくドウを構成員の視点から分析して、ドウが夫婦と同義であることを明らかにした。夫婦を単位とする儀礼の実践が親の家のまわりに子供の家をゆるやかにつなぎとめながら漸次的に前進する彼らのロングハウス型の移動形態を生み出したとする。カレン族の超自然的存在間には基本的に競合関係が存在する。中でも双頭となるのがドウ（家）の神とゴ（国）の神である。二神はともに相容れず、死者のゴに存在しながら異なる他界観を形成している。その両神を並び立たせられるのは夫婦の間だけであり、その仕組みが移動の単位である夫婦に安定性とともにも機動性をもたらす可能性を推察した。すなわち夫婦は両神を並び立たせるために安定した「対」でなければならず、かつ空間と時間を均衡させるがゆえに独立した単位として存在しなければならないからである。

第6章では移動によって形成されるゴ（国）とジ（村）とドウ（家）において定住化ゆえに、すなわち移動できなくなったために生じつつある齟齬を1980年代後半から1990年代前半の調査地の現状として描いた。動的なゴに生じた固定化と階層化を示し、ジコの資格に生じる諸条件の相互矛盾がジコの権威を低下させていく過程を記述した。また男性の神であるゴの神が水田耕作の導入によって衰退していく経緯とともに、女性の領域であるドウを司る神の放棄が始まる瞬間を描いている。

終章では全体の議論を要約するとともに序章で提起した問題を再検討しながら、カレン族の移動の起因を考察した。彼らの移動は彼らの信仰する超自然的存在間にある競合関係と長幼の序にもとづく序列によってもたらされており、20世紀初頭のロングハウスの解体によってさらに機動力を高めることになり、東辺のフロンティアを押し広げたと推測する。しかし一支流に一つのジというゴ形成が人口増によって維持できなくな

り、1980年代のタイ国の政策もあって移動の終焉を迎えたと結論付けた。

【論文の評価と審査の概要】

本論文の特徴は、ち密で徹底的なフィールドワーク、及びそれを論述する民族誌としての完成度の高さにある。そうした記述による事実から、人間社会が成り立つ根本に移動があることを説得的に示した。それはカレン研究において規範となるような水準を示したにとどまらず、人類学におけるフィールドワークの模範を示すような調査研究であると評され、審査員全員一致して民族誌としての論文の価値を高く評価した。

本論文で中心となったデータは、吉松氏が行った1986年の予備調査、1987年から88年までの一年半の現地滞在調査、およびその後1994年まで行なわれた補足調査にもとづいている。すでに20年以上前に行われた調査データは、現在ではすでに定住し、次々と商品作物が導入されているカレン社会の状況がまさに移り変わるその転換点を示している。その時期は、定住化が急速に進行しつつあったが、依然として調査地では移動の文化が保持されていたとする。本論の目的はこの定住化以前の移動を核として組織編成されていた彼らの社会の成り立ちを記述し、そこから移動の起因を探ることにある。それは同時に定住化の過程による社会変化を明らかにすることにもつながる。

1970年代から1980年代にかけて、同時期に同じくカレンを別の場所で調査した審査員の一人は、移動が止まりフロンティアが終息しつつあるという感覚を皆がもちながら正面切ってとりあげることのなかったその時代における問題構成を、移動というかたちで見事に捉えていると評価した。

最終試験においては、次のような質問やコメントがなされた。

まずは、また実際の地図上でみると吉松氏の調査地はむしろ都市に近いようだが、なぜここが移動のフロンティアといえるのか、という質問に対し、タイ政府の政策は国境近辺で重点的に行われており、むしろ都市に近い調査地がコントロールの空隙ともいえる状態であったこと、それゆえに仏教化などの政府による介入が調査時点ではまだ影響を及ぼしていなかったと説明した。次に、焼畑耕作から水田耕作という生業形態の変化が先か、それとも移動を核とするカレンの社会的論理の変化が先かという質問に対しては、水田耕作導入が定住の契機となったという従来からの説があるが、カレンは水田を放棄しても移動しており、水田耕作がはじまったから定住したのではないと回答した。つまり、吉松氏は従来の説を覆し、移動する土地がなくなったところで定住化が起こり移動を核とする内的論理が変化して、水田耕作が主流になったという自らの説もデータで説得的に示した。

最後に、カレン社会の記述があまりに理路整然としており、実際の人々の行動に共

有された規範への逸脱がないのかどうかというコメントに対しては、別の審査員から章の構成を変更して、移動できなくなったがゆえに生じつつある調査地の現状の齟齬を記述している最終章を前にもっていくことで、そうした印象が変わるのではないかと示唆があった。吉松氏も本論文では個人の葛藤よりは、社会編成の変化に焦点化したため、そうした葛藤がみえにくくなり静的な印象を与えた可能性については認めつつ、定住化した後の現在におけるカレン社会においてより個人の偏差や葛藤がより見えやすくなっている可能性についても言及した。

以上のように、吉松氏は審査員からだされた質問やコメントに一つ一つ丁寧に誠意を持って回答し、論文全体の理解を得るよう応答したといえる。吉松氏の論文は、データの質と記述において高く評価でき、今後の同分野の研究に裨益するところが大きいと考える。審査委員は全員一致で、本論文及び最終試験を合格と判断し、ここに大学院教授会に報告する次第である。